

松本節太郎さん

下総玩具の創始者 逝く

「手びねり」で独自の世界

独自の手法を考案し、素朴で味わいのある郷土玩具の作家として知られる松本節太郎さん(根戸在住)が、老衰のため先月二十七日に亡くなった。百一歳だった。松本さんは、粘土を手で捻る「手びねり」というオリジナルの手法を用いて野焼きした土人形や、和紙を張り合わせた張り子人形など「下総玩具」という独自の世界を築き上げた。『私は芸術家ではない。玩具を作っているだけ』と云くなる直前まで創作活動への意欲を燃やし続けていたという。『人生は雨だれだ』といって制作した「あまだれ」が最後の作品となった。



作品を手にする松本節太郎さん

松本節太郎さんは明治

三十六年、東京下谷の染物屋の四男として生まれた。戦災により昭和二十一年に柏へ疎開。戦後、地元の粘土を使い、手びねりという手法で「首人形」や「お面」、「花魁」など独自のアイデアで玩具を創作するようになった。作った作品は、上野や浅草、亀戸天神まで足を運ぶ



松本節太郎資料室(ギャラリー・ヌーベル内)

を運び売り歩いて生計を立てた。

「金銭的な欲はなく、人との交流をできる限り限定し、創作活動へ情熱を注いだ人だった」と二十年来の親交があったギャラリー・ヌーベルの鈴木昇社長は故人を偲ぶ。

「子どもの玩具が大人の玩具になりつつある作品」と評されるように、昔ながらの温かみのある作品だけでなく、人間の本質へ鋭く迫り、人の卑しい部分を表現した「二枚舌」のお面などユーモラスで風刺的な作品を生み出した。

昭和六十三年には東葛地域の文化功労者に贈られる「ヌーベル文化賞」を受賞。時代とともにその作品性は評価され、百科事典にも紹介されるようになった。平成九年、柏駅西口ダブルデッキの側壁に小面八十五点が設置された。

鈴木社長は「自分の中にある発想を組み合わせる」と創作していた。そのアイデアは泉のように湧き出し尽きることがなかった」と振り返る。特に晩年の創作へのこだわりは強く、その徹底ぶりは作品の幅を広げていったという。

松本さんは「作品を通して見る人に元気を与えられたら」と作品をギャラリー・ヌーベルに寄贈。一年前に「松本節太郎資料室」が開設した。そこには、松本さんが心血を注いだ約六百点の作品が並ぶ。